

チャレコミ・ギャザリング 2020 年春レポート

NPO 法人 G-net インターン生

須藤楽斗

初めてのオンライン開催

2020年3月くらいから、日本でも新型コロナウイルスの感染拡大を防止するために、大規模な自粛を強いられていた。そんな新型コロナウイルスが猛威を振るう中で、今回のチャレコミ・ギャザリングは開催された。普段であれば東京で行われているギャザリングだが、今回はもちろん東京へ行くことはできるはずもなく、オンラインでの開催となった。

当初は僕自身も、オンラインで丸二日間も集合研修ができるのかという疑念を抱いていた。だが実際に当日を迎えると思っていたよりもスムーズに進めていくことができた。更にオンラインだからこそ、効率的に進めることもでき、研修として非常に有意義なもので、多くの学びを得ることができた。

初めてのギャザリング

今回は初のオンライン開催で、尚且つ初のギャザリングへの参加だった。ギャザリングでは普段、日本の各地で活動しているチャレコミのメンバーが一堂に集まり、お互いの進捗を知ることで自分の立ち位置を再確認することや、チャレコミという大きな集団としてのビジョンや方向性などの概念的なことについて考えることができる機会でもある。

日々、毎日のタスクをこなしていると、ふとその目的を忘れてしまいそうになることがある。そんなときに自分の頑張る理由を見つけることで、再び前に進むことができる。今回のギャザリングは私にとって頑張る理由を見つける場だった。

田舎でのインターン

私は自分自身が普段地方都市で活動していることもあり、「田舎でのインターンの価値」というテーマの分科会に参加させていただいた。この分科会を通して感じた田舎でのインターンの価値とは「働き方の多様性を見て知り、体感することができる」ということである。

働き方改革という言葉が叫ばれ、働き方に多様性を持たせ、多様な働き方を許容できる社会を作っていくことの重要性は多くの人を感じていることである。だが実際に、多くの人働いている大都市と呼ばれるところでの働き方は、使用者と労働者、経営者とサラリーマンというように二極化しているように感じる。

では田舎を見てみると、多くの人自給自足の暮らしをし、百姓的に多種多様な仕事を掛け持ちしている。実は田舎での働きの方が多様であったのだ。そのような地域の中に学生がインターン生として飛び込み、地域との関係性を築いていくことで、学生は昭和的な社会から脱却することができ、新しい価値観を形成することができる。日本の未来は田舎と呼ばれる地方にこそあるのかもしれない。

ギャザリングを終えて

今、日本では新型コロナウイルスの感染拡大防止のために、緊急対策的に戦略を考える

必要がある。このような有事の際に迅速な判断をして行動に移していくことは非常に重要なことであり、ここでの対応がターニングポイントになることは間違いない。しかし今後私たちが、更に前へ進んでいくためには中長期的な戦略を考えていく場面に来ているのだと思う。このような社会の価値観が大きく変わろうとしている中で、新しいビジョンを打ち出し、率先して社会の課題を解決していき、新しい価値観を作っていくことが私たちに求められている。そのためにも、今回のギャザリングで考えたことを各地のコミュニティへ持ち帰り、地域のプレイヤーとして、できる限りのことを尽くしていきたいと感じた。そして、このような貴重な場にスカラシップ生として参加できたことに感謝したい。